

あるグループの「新入会員オリエンテーション」を受けた。久しぶりに新入社員になった気分です。丁寧な説明してくれる「先生」の話しに引き込まれた。

このグループとは、「(一社)ディレクトフォース(DF)」(東京都港区、段谷芳彦代表理事)の教育部会活動の1つである「理科実験グループ」である。

DFは、現役時代に企業経営や研究開発の担い手であったり、官界などで高い見識を積み重ねてきたシニアたちが、「社会に役立ち」「生きがいを感じる」ことを目的として、2002年に設立された団体で、現在約630人の会員を擁する。

会員は、DFの活動の3本柱である「社会貢献と研鑽(けんさん)活動」「企業支援活動」「交流交友活動」に自主的に参加すること、で、「生きがい」を実感することができる。

筆者もDF会員として、50以上ある活動グループや研究会、同好会の中から「理科実験グループ」への参加を希望し、冒頭のオリエン

テーションとなったわけである。このグループを選んだ理由は2つ。「理科実験を通じて次世代を担う子供たちの笑顔に出会う」というメンバーの熱い思いと提供される実験プログラムのクオリティ(品質)の高さだ。

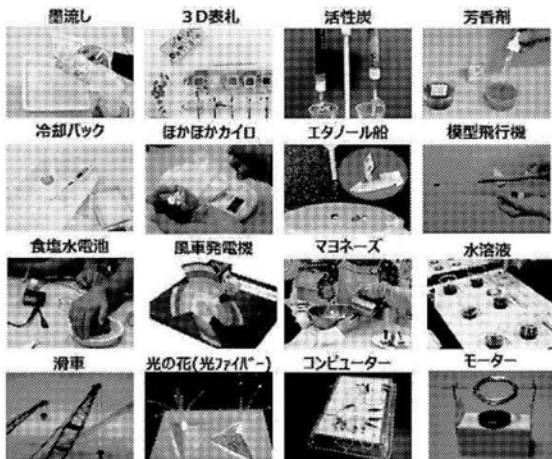
和幸さんは、グループ入会当時をこう回想する。「ものづくりの会社で社会人生をスタートし、様々な仕事をし卒業(定年退職)しました。ものづくりへのこだわりは人生の大半を過ごした環境からも当たり前に持っていましたし、この文化は継承すべきだとも思っていました。『子供たちに理科実験を通じて理科好きになってもらう』という言葉が私に響き、何かが出来るかなという気持ちになりました」

元技術者を中心としたメンバーに持つべきだとも思っていました。『子供たちに理科実験を通じて理科好きになってもらう』という言葉が私に響き、何かが出来るかなという気持ちになりました」

人生のススメ

定年後の理科実験通して「ものづくり」を伝承

理科実験グループ オリジナル実験テーマ (一部)



(提供: ディレクトフォース 理科実験グループ)

メンバーは誰でもテーマを提案することができ、毎月開催する「テーマ定例会」で、「実験のコンセプトはグループの理念に合致するか」「実際の実験に耐えられる内容か」「運営要領の詳細に漏れはないか」などが検討される。こうしたメ

ンバー相互の厳しい検品をクリアしたテーマだけが採用される。1つのテーマが実用段階になるまで、数カ月かかるのだそう。中には数年かけて実現したものもあるという。



得丸英司(とくまる・えいじ) 1957年生まれ。大手生命保険会社で25年間コンサルティング業務に従事。星和ビジネスリンク専務執行役員、日本FP協会常務理事(現特別顧問)慶應義塾大学講師などを歴任。定年後研究所初代所長を務める(現特任研究員)。著書に「定年後のつくり方」(廣済堂新書)。

定年後、研究所 日本で初めての「50代以上会社員」に特化した、定年後の準備支援機関。定年後の「自走人生」を目指す中高年会社員を応援。中高年会社員向け学習システム『キャリア羅針盤』を開発中。
(https://www.teinengo-lab.or.jp)

